

日本婦道記

墨丸

山本周五郎

青空文庫

お石いしが鈴木家へひきとられたのは正しょう保ほう三年の霜月のことであつた。江戸から父の手紙を持って、二人の家士が伴つて来た、平之丞へいのじょうは十一歳だったが、初めて見たときはずいぶん色の黒いみつともない子だなど思つた。

「お石どのは父上の古いご友人のお子です」

そのとき母はこう云つて彼にひきあわせた、

「ご両親ともお亡くなりになつて、よるべのないお気のどくな身の上です、これからは妹がひとりできたと思つていたわ劬いたわつてあげて下

さい」

母がそう云うとお石はそのあとにつけて、きちんと両手をそろえ、

「どうぞおたのみ申します」

と云いながらこちらを見あげた。まなざしも挨拶の仕ぶりも、五歳という年には似あわないませた感じだった。平之丞はひとりっ子なので、時どき弟か妹がひとり欲しいと考えることがあった、けれども並みよりはからだも小さく、瘦せていて色が黒くて、おまけに髪あかの赭あかいお石の姿は、少年の眼にさえいかにもみすぼらしくて、可愛げがなかった。——妹ができたといつてもこれでは自慢にもならない、そう思つてちよつと頷うなずいたきり黙っていた。

お石ははきはきした子だった、縹きりよう緞こうこそよくないが明るい澄みとおるような眼をもっていて、なにか話するとき聞くときにはこちらをじつと見あげる、それは相手に自分のいうことを正しく伝えよう、相手の言葉をしっかりと聞きとろうとするためのようだが、汚れのない澄みとおった眸子ひとみを大きく瞠みはつてまたたきもせずに見つめられると、なにやらおもはゆくなつて、こちらのほうが先に眼をそらさずにはいられない。起たち居いもきちんとしていた、みなしごとという陰影など少しもないし、云いたいことし為したいことは臆せずにする、爽やかなほど明るいまっすぐな性質に恵まれていた。もちろん平之丞の年齢ではそういうことに眼も届かず、元もと関心もなかったが、みつともない子だという感じだけはいつかしら

うすれてゆき、一年ほど経つうちにはかすかながら愛情に似たものさえうまれてきた。鈴木家は上^かみ馬場仲の小路というところがあり、五段ほどもある庭は丘や樹立^{こだち}や泉池^{せんち}など、作らぬままの變化に富んでいるため、同じ年ごろの友達が集まってはよく暴れまわった。彼らもはじめはお石には眼もくれなかつたが、その性質がわかるにしたがつてしぜんと好感をもつようになり、なにかあるとよくなかまにして遊びたがつた。そのなかに誰よりもお石と親しくする松井六弥^{ろくや}という少年がいた、松井は同じ老職のいえがらで、屋敷も近く、平之丞とはもつとも仲のよいひとりだった、彼にはお石と一つちがいの妹があるので、あしらい方も慣れているし、なにを好むかも知っているらしく、ときおり美しい貼^{はり}交^まぜ

の香こう篋ばことか、人形道具とか、貝合せとか、小さいおしろい白粉いつぽ壺ななど
 を持つて来て呉くれたが、このように好意をもっている六弥でさえ、
 時どき嘆息するように「それにしても色が黒いな」と云い云いし
 た。したがってほかの少年たちは、その年ごろのならいで「お黒
 どの」とか「烏からすまる丸」とか蔭かげで色あだないろ綽名なを呼んだ、はじめは
 そんなことも気にならなかつたが、或るときふと哀れになり、ど
 うせ云われるならこちらで幾らかましな呼び方をしてやろうと思
 い、「黒いから墨丸がいい」と主張した。すみまるという音は耳
 ざわりもよいし、なにごころなく聞けば古雅なひびきさえある。
 それで少年たちはみなそう呼ぶようになった。

江戸詰めそうべえの年寄役だった父の惣兵衛が、それから六年めの慶けいあ

安四年に岡崎へ歸つて來た。国老格で吟味役を兼ねることになつたのである。ながいあいだ留守だつた父が歸つたので、家の明け昏くれも變らずにはいかなかったが、そのなかでもお石の存在のはつきりし始めたことが眼だつてきた。それはなにかにつけて惣兵衛がお石に用を達たさせるからで、それまではたいてい母のそばにじつとしていたのが、屋敷うちのどこにでも、まめまめと立ちはたらく姿が見られるようになったのだ。平之丞の部屋へもよく來た。「父上さまがお呼びなされます」とか「ご膳ぜんでございます」とか、そのほかこまごました取次は殆んどお石の役になつた。：：いつしよに暮すようになって以來、しだいに近しい氣持もうまれ、実の妹をみるような一種の愛情さえ感じだしたが、それとて

かくべつ深いものではなかったので、そのとし元服してから、平之丞は再びお石に対して無関心になつていった。

お石が十三になつた年のことである。春さきのことだつたが、ふと平之丞の部屋へはいつて来て坐つた。なにか用事かと訊くと、珍らしくもじもじしながら「文鎮を貸して頂けませんでしょうか」といった。

「お石は持つていないのか」

「いいえ持つておりますけれど……」

そう云いかけて眩まぶしそうに眼を伏せた。

「持つてゐるのに欲しいのか」

そう訊くと、お石は思いきつたという風にはいと領き、

「いつも文箱ふぼこの上に載っているあの文鎮を貸して頂きたいのです」と云つた。

一一

平之丞は文箱の上を見た。それは彼が亡くなつた祖父から貰つたものである、幅七分に長さ五寸あまりの翡翠ひすいで、表には牡丹ぼたんの葉と花が肉高な浮彫りになっている、翡翠といつても玉にするほどの品ではないが、琅玕ろうかんがかつた緑の深い色が流れたように条しまを描いているのも美しいし、なめらかな冷たい手触りや、しつとりとしたちようど頃合の重さなども好きで、彼の持物の中では大

切にしている品の一つだった。お石はそれを知っているのだろう、危ぶむような眼でじつとこちらを見あげている、それがひどく思ひ詰めたようすなので平之丞は苦笑した、そして、

「なくしてはいけないぞ」

と云つて取つてやった。

父が帰ると間もなくから、お石はむろしやうはく榎尚伯という和学者のもの

とへ稽古にかよいはじめて、その頃ではもう歌なども作るようになっていた。むろんまだ真似ごとの、ほんの字数がそろそろくらいのものであったし、時どき母から「なかなかよく詠んでありますよ」と見せられるものも、平之丞にさえそれほど感心した記憶はなかった。そして、たぶんあの文鎮を置いて、しさいらしく歌集など

読んでいるのだらうと思つて苦笑した。そうしてたびたび歌を見せられるうち、或るとき菼はぎを詠んだ一首があつて、それに墨丸という名が記してあるのをみつけた。訊いてみると母は、

「それがあの子の雅号だそうですね」

と云つて笑つた、

「色が黒いからそう付けたのですと、男のようでおかしいと云つただけけれど、お師匠さまもおもしろいと仰おっしやつたそうで、それにきめたのだそうですね」

「……………」

平之丞はふと心にかすかな痛みを感じた。字をみてすぐ思ひ出したのだが、それはかつて彼がお石のために選んだ綽名である。

そんなことがわかると叱られるので、友達なかまのほかには決してもらしたことの無いものだったが、お石は聞いて覚えていたのに違いない、——どんな気持だったろう。すでに十九歳になっていた彼には、そのときのお石の心が哀れにおもいやられた。おんなが容貌をそし貶られるほど辛いものはないという、お石はまだ幼なかつたけれど、みなしごでもありよく気のまわる性質だったから、おそらくそんな蔭口を聞いては平気でいられなかつたろう——わるいことをしたものだ。平之丞はそう思つて自分を恥じた、そしてそのときから、お石に対する彼の態度がずっとやさしくなつたのである。

鈴木家にはしばしば旅の絵師とか書家などが来て滞在した、惣

兵衛がそういうことを好むので、これらの者のために部屋が設けてあり、食膳なども別に揃そろえてあつて、滞在ちゆうはかなり鄭ていち

重ようにもてなされる。旅をまわるほどなので、絵師、書家といつ

てもたいていさしたるものではない、然しそういう中からごくたまにはあるが、とびぬけた作を遺してゆく者がある、惣兵衛にとつてはそれがこのうえもない楽しみだつた。……こういう人び

とのなかに、或るときなにかしけんぎ校ぎょうとかいう琴の名手がいた。

すでに六十を過ぎたらしく、鶴のようにとたとう譬ふえの相ふわしい瘦そ躯うくめしで盲めしいた双眼を蔽おほい隠すように雪せつぱく白はくの厚い眉毛が垂れ、それ

がぜんたいの風貌ふうぼうにきわだつた品格を与えていた。どうどういう身の上でいかなる仔細しさいがあつたものだろう、惣兵衛のほかほかに家人はな

にもしらなかつた。検校はあしかけ四年あまりも滞在し、そのあいだお石に琴を教えた。それも初めは気のりのしないようすだったが、やがてこれはと思つたらしい、だんだん熱心になつてゆき、教え方も厳しく、時にはずいぶんはげしい叱り声を聞くこともあつた。平之丞には琴など興味もないので、また稽古をしているなと聞きすごすだけだったが、いつだつたか父と検校との三人で食事をとつたとき、検校がしきりにお石の素質を褒めるのでおどろいた、

「音楽をまなんで音を聞きわけるとはやさしいが、音の前、音の後にあるものをつかむことはなかなかむつかしいのです、お石どのはすらすらとそれをつかみなさる、お石どのの弾く一音一音

の前と後につながる韻の味はかくべつなもので、よほど恵まれた素質と申上げてよろしいでしょう」

「ではその道で身を立てることもできましょうか」
父がそう訊いた。

「いやそれは恐らく困難なことでしょう」

検校はしずかに頭を振った、

「人を教えるにはもつと平易がよろしいのです、お石どのの琴は格調が高すぎるとでも申しましょうか、ひと口に云うとなかなかな耳ではついてゆけないのです」そしてこういう特殊な感覚をもっている者は、よほど注意しないとゆくすえが不幸になりやすいというようなことを云った。

そのとき父の顔にあらわれた憂愁の色は忘れがたいものだった。理由はわからないが、検校の言葉が父の心にある危惧きぐのおもいを裏づけたというように、……父は眉をひそめ眼をつむって、いつときじつとものおもいに沈んだ。なにがそのような父の心を衰かなしませたか、平之丞にはまるで想像もつかなかった、そしてそれを知るためには更にさらにながい年月が必要だったのである。

三

平之丞が二十三歳になった春のこと、松井六弥の催しで観かん桜おうの宴がひらかれ、ごく親しい者ばかり五人ほど集まった。松井は

くるわうち
曲輪内まがりにある屋敷のほか大平川の畔ほとりに控え家を持つていた。招

かれたのはその控え家のほうで、川みぎわの汀みぎわまで続く広い庭に若木の

桜が三四十本あまりあり、まだ四分咲きぐらいだったが、満枝に

綻ほころびかかった花の色は、盛りよりもあざやかに美しかった。……

かれらは汀こかげに近い樹蔭もみせんに毛氈もみせんを敷いて、花枝かしさかずきを盃さかずきにうつしなが

ら小酒宴をたのしんだ。むかし暴れまわった頃とは違つて、それ

ぞれ役にも就き、中にはもう結婚している者さえあるので、話題

もとかく政治に関するものが多く、その年ごろの癖ひびでずいぶん機

微ひびに触れることも少なからず出た。そのうちに樋口ひぐち藤九郎という

者がふと声をひそめながら、

「うえもんのすけさまが水戸おたねの御胤おたねだということを聞いたが、お

のおのは知らないか」

と思ひもかけぬことを云いだした。右衛門佐うえもんすけとは藩主水野家の世子忠せいしただはる春のみきのすけことをいう。けんもつ忠ただよし善の次子であり、長子の造酒之助が早世したため世継ぎとなつた、二年まえ十五歳のときこの岡崎へも来て、かれらはみなめみえの杯を賜わつた組である。

「そんなばかなことが」

と、松井六弥が笑つた、

「おれもそう思うけれど」

藤九郎はなお声をひそめて云つた、

「その噂うわさはなかなか真実らしいのだ、お上が水戸中将みつくに（光圀）

さまに心酔していらつしやることは知らぬ者はないだろう、御心酔のあまり中将さまに懇願あそばして、御誕生まえから御子を頂戴するお約束をなすつた、そして御出生あそばすと産着のまま屋敷へお迎え申したのだという、俗に親知らず子といつて産屋からすぐに頂いて来た、その証拠にはうえもんのすけさまの御守り刀は葵の御紋あおいちらしだというぞ」

藤九郎の父はかつて忠善の側近に侍じしていたことがあるし、話の首尾がととのつているので、六弥もこんどは笑わなかつた。

「そのことに就いて別にもう一つ秘事があるんだ」

と、藤九郎は黙っているみんなの顔を見まわしながら続けた、「今から十余年まえに、江戸屋敷で小出こいで小十郎という者が切腹し

て死んだ、あれは岡崎でもかなり評判になったから知っているだろう」

そのことはみな覚えていた。小出小十郎というのは島原の陣でめざましくはたらいた浪人で、忠善にみいだされて篤く用いられた。ひじょうに一徹な奉公ぶりで知られ、重代じゅうだいの者にも云えないような諫言かんげんをずばずば云うし、家中とのつきあいなども廉直無比で名高かった。それがちようど十二年まえの正保二年、忠善の忿いりにふれて生涯しょうが蟄居いちつきよという例の少ない咎とがめをうけたが、彼はその命のあつた日に切腹をして死んだのである。

「あのととき重科じゅうかにかかわらずその理由は不明だったが」

と、藤九郎は言葉を継いだ、

「実はうえもんのすけさまの事に就いて直諫じきかんしたのだそうだ、あのころはまだ造酒之助さま御在世ちゆうだった、小十郎は御家の血統のために右衛門佐さまを廃し、造酒之助さまを世子にお直しあるよう、繰返しお諫いさめ申したという、殿には『あらぬことを申す』とひじょうなお忿りで、とうとうあのような重科を仰せだされたのだそうだ」

「もうよさないか……」

平之丞がそう云つて話をさえぎつた、

「殿があらぬことを申すと仰せられたのならそれが正しいに違いない、そういう噂うわさは聞いた者が聞き止めにならないと、尾鰭おひれがついて思わぬ禍を遺すものだ、ほかの話をしよう」

「そう云おうとしていたところだよ」

と六弥が手をあげた、

「みんな向うを見て呉れ、実はあれがきよようの馳走なんだ」

そう云われてみんな救われたように、彼の指さすほうへふり返った。

広庭のかなたに小袖幕をかけまわした席が設けてあり、そこへいま色とりどりの花を撒まきちらしたように、美しく着飾った娘たちが十人ばかり出て来た。やはり花見の宴に集まったのだろう、よく見ると桃山風の華麗な屏びょうぶ風の前に琴が二面すえてある、娘たちは初めしきりにゆずり合っていたが、座がきまるとやがて代る代る琴をひきはじめた。桜の花蔭に、掛けつらねた小袖幕と、

極彩色の屏風と、そして眼もあやな娘たちと衣装と、これらの絢らん爛たる丹青たんせいのなみの中からわきおこる琴曲の音いろと、すべてがあまり美しく、見る者はむしろ哀愁をおぼえるくらいだった。いつも口の悪い三寺市之助という若者も、さすがに槍のつけどころがないとみえ、うんと唸うなったきり言葉が出なかつた。そして暫くすると立ちあがって、「おれはあの中から嫁を選んでくる」そう云いながら、樹蔭づたいにそつと近づいていった。平之丞はこのあいだずっと、娘たちの中にいる一人の姿を熱心に見まもっていた。それはお石だった、はじめ出て来たときはどこかで見おぼえがあるくらいに思った、そして間もなくそれがお石だとわかると、彼はわれ知らず眼をみはった。あんなにも成長していたの

かと心から驚かされた。

四

平之丞の印象にあるお石は、色の黒い、赭毛の、からだの痩せて小さな、みつともない子であつた。けれどもいまそこに見るお石は「みつともない」どころではなく、十人あまりいる娘たちの中でも際だつて美しい、その美しさは髪化粧や衣装のためでもなく顔かたちでもなかつた、いつてみればお石のぜんたいから滲にじみ出るもの、外側の美しさではなくて、内にあるものがあふれ出る美しさのようだ。——そうか、もう十七になるんだな、平之丞は

ふと春秋を思いかえすような気持で、眼を細めながらその姿を瞞みつめつづけていた。琴はおのおの得手の曲を弾くのであろう、そしてみな相当にたしなみのある娘たちとみえて、なんの知識もない平之丞の耳にさえ神妙に聞えるものが少なくなかった。こうして人数の半ばまで入れ代ったとき、たいへん手のこんだ曲をみごとに弾きこなす娘があつた、それまでのものとは際だって鳴り高であり、音いろの美しさと転調のあざやかさは、酔わされるようだった。

「あれが妹のそでだ」

六弥が平之丞に向かつてそう囁ささやいた、

「きようはお石どのの琴を聴くつもりであんなにしたくをしたの

だが、自分もいっぱし聴いて貰うつもりだろう、ことによると弾き負かす気でいるかも知れない」

「おれはまるで耳なしだからわからないが、そでどのの琴は抜群のようじゃないか、お石などは問題ではないだろう」

「いやそれが違うんだ」

六弥は盃をとりながら云った、

「そこもとの家にいた検校がいつか家へ来たことがある、そでがちよつと手なおしをして貰ったのだが、そのとき検校がお石どのの評をしていった、おれは聞かなかつたが絶賞だつたそうだ、それいらい家ではいつかいちどお石どのの手ぶりを聴き、そでにも弾きくらべさせたいと話していたようだ、あの小袖幕の向うには

きつと母も聴きに來ている筈だよ」

そんなにお石の琴が評判になつていたのか、平之丞もさすがに無関心ではいられなくなり、あれだけ弾きこなすのでのあとで、はたしてどれほどの腕をみせるかと、ちよつと坐り直すような氣持でお石の出るのを待つていた。

そでが弾き終ると、こちらまで聞えるほどの嘆賞の聲がおこつた。ひとしきり賑にぎやかなざわめきが続き、やがてお石の番になつたらしい、だがお石は立とうとはしなかつた、まわりの者がしきりに促しているし、六弥の妹がそばへいつて懇願するようすだつた。けれどもお石はおつとりと頬笑み、こうべを振るばかりでどうしても立たなかつた。そこへ三寺市之助が戻つて來た。

「お石どのは出ないぞ」

彼は自分の席に坐りながらそう云つた、

「それほどのたしなみがない、あんまり恥ずかしくて、ただそう云うばかりだ、ほんとうかね」

「そうだろうな」

と六弥が微笑しながら頷いた、

「検校の評がたしかならこんな席で弾く筈はない、そでは余りたやすく考えすぎたんだ」

「そんなこともないだろう」

平之丞はとりなすように云つた。

「たしなみがないと云うのも自分としては偽りのない気持だろう

し、ふだんこういうつきあいが無いから恥ずかしくもあるのだらう、なにしろ墨丸だからな」

「ああ墨丸か」

脇からそう云う者があり、みんなあの頃のことを思いだしてなごやかに笑った。

平之丞がお石を見なおすようになったのはそれからのことだ。

見る眼をちがえると、それまで知らずに見すごしてきた事の端はしに、お石の心ぎまのあら顕われをみつけてはおどろく例が少なくなかった。人の気づかないところ、眼につかぬところで、すべて表面よりは蔭に隠れたところで、ちみつ緻密な丹念な心がよく生かされていた。下女に代って風呂場の掃除をしたり、かまど釜戸の火をた焚いたり、

下男といっしよに薪を作ったりすることは、母でさえながいこと知らずにいた。料理には特に巧みで、粗末な材料からどんな高価なものかと思わせるような物をよく拵こしらえた、或るとき茶菓子に団子を作った、さつくりと齒あたりの軽い、鄙ひなびた珍らしい味で、平之丞なども皿を代えて喰たべた。あとで聞くと稗ひえ団子だという、然もその稗は田のほうへいったとき百姓が抜き捨てたものを拾い集めて来て、自分で干し自分で搗つき、粉に碾ひいて作ったということだった。

「あの子のすることには時どきびっくりさせられますよ」
そういう母の言葉には、いつも感嘆の調子が温かくこもっていた。

黒いと思つた肌色がきめのこまかな小麦色になり、艶つやつやと健康なまらみを帯びてきた。髪もいつか緒みがとれたし、背丈も並みよりはむしろ高いくらいに伸びた。注意して見るにしたがつて、こういうことの一つ一つが平之丞の眼を瞠みはらせ、云いようもなく心を惹ひきつけられた。彼は幾たびも考えてみたのち、それがもつとも自然であり望ましくもあると信じたから、母にうちあけて相談してみた、

「あれなら鈴木の家として恥ずかしくないと思ひますが、どうでしょうか」

「そうですね……」

母はまるで想像もしていなかつたのであろう、初めはかなりた

めらうようすだった。然しそう云われて考え直すと、こんどは平之丞よりも乗り気になりだした。

「とにかく父上に願ってみて下さい」

そう云って、彼は安心してすべてを母に任せた。

五

父も初めは難色をみせたそうである。

「今ひとつ縁談があるのだが……」

そういうことで暫く保留になった。そしてその父もよかろうと承知し、はじめて母からお石に話をした。するとお石は考えてみ

ようともせず、きつくかぶりを振って断わった。

「わたくし琴で身を立てたいと存じます、生涯どこへも嫁にはま
いらないつもりでございますから」

理由を訊くところ答えた。

「でもあなたのお琴はひとに教えるには不向きだと、いつぞや検
校も仰しやっておいでだったでしょう」

母は意外の思いでそう云った、

「たとえそうでなくとも、おんなが独り身で暮すということとはむ
つかしいものです、若いうちはよいけれど、年をとってからの寂
しきは堪えられないと云いますからね」

それから色いろ条理をつくして説き、よく考えてみるようにと

云ったが、お石はいつものおとなしい性質には似あわな^{かたく}い頑なさでかぶりを振りつつけた。

「どうぞこのお話はごめん下さいまし、それにわたくし近ぢかにおゆるしを願つて、京の検校さまの許^{もと}へまいりたいと存じていたのですから」

ますます思いがけない言葉なので、母は暫くあつけにとられていた。

「それは検校となにかお約束でもあつてのことですか」

「はい、ここをお立ちなさるおり、わたくしから達^{たつ}ておたのみ申したのでございます」

「検校は来いと仰しやつたのですね」

「はい……」

お石はきつく唇を噛みながら俯向うつむいてしまった。

「まさかと思いました」

母はその始終を語りながら、まるで裏切られた人のように眼をいからせた。

「きょうまでせわをしたことは云いません、初めからそんな積りはなかったのですからね、でも人情があればあんな断わりようはない筈です、そればかりならよいけれど、わたしたちには内密で検校とそんな約束をしていたなどはあんまりではないか」

「そうお怒りになってもしようがありません、まあ少し待ってようすをみることにしましょう」

平之丞は母をなだめながら、いちど自分からじかに話してみようと考えた。然しそのおりも来ないうちに、とつぜん父が倒れた、城中で発病し、釣台で家へはこばれて来たが、意識不明のまま三日病んで死去した。

悲嘆のなかにも平之丞はとり返しのつかぬことをしたのに気づいた。それはお石の素性が知れずじまいになったことだ。初めひきとるときに「旧知の遺児である」といったきり、どこのなに者の子なのか母にも話してはなかった。二度ばかりそれとなく平之丞が訊いてみたけれど、「そのうちに話そう」と云うだけでどうとうその機会がなかったのである。だが父の遺品のなかになにかみつかるかも知れない。僅かにそれをたのみにしたが、葬礼の忙

しさに追われたし、家督とか、父の役目を継ぐ事務などでそのいとまがなかった、そのうえ忌が明けると間もなく、お石はついに鈴木家を出て京へのぼることになった。……お石がたのんだのだらう和学の師である檜尚伯がきて、母を説き平之丞を説いた、

「琴のほかに学問も続けたいと云っておられるし、さいわい京には北村季吟きぎんと申す学者がおり、以前から親しく書状の往来があるので、私から頼めばせわをして呉れることでしょう、お石どのの国学にも才分がおりだから、場合に依ればこのほうでも身を立てることができると思いますが」どうか望みをかなえてお遣りなさるように、老学者らしい朴訥ぼくとつな口ぶりでそう云うのだった。平之丞はもういけないと思つた。母も諦あきらめるよりほかはなかつた。

然しどんなにくやしかったことだろう、

「わたしはもうあの子のことは考えるのも厭いやです、好きにするがいいでしょう」

きびしい言葉でそう云い云いしたが、その顔には悲しい落胆の色がありありとみえた。

おそらくは実のむすめに反そむかれたよりも、悲しく、辛く、くちおしかつたに違いない。それでもいよいよ京へ去る日が近づくと、「身よりのない子だから」

と云つて、夏冬のしたくを作ったり、細こまごました道具を買いととのえたりし、出立のときには自分で髪を結つてやつたりした。

「いどころが定きまつたら便りを下さいよ」

別れには母はこう云つて泣いた、

「あなたが考えるより世間はきびしいものです、いつどのようなかなしいことにゆき遭うかもわかりません。あなたは鈴木のみすめも同様なのですから、そんなときは意地を張らずに帰って来るのですよ、わたしはいつでもよろこんでお待ちしているのですからね」

お石は泣かなかつた、少し蒼あおざめた顔を俯向け、僅かに、はい、はいと答えるだけだつた。平之丞にはそれがもう心もここにない者のようにみえた、そして母のために忿りを感じ、言葉を交わす気にもなれなかつた。……お石はこうして京へ去つた、信じられないほどあつさり、まるで旅人が一夜の宿から立つてゆくかの

ように、さばさばとお石は鈴木家から去っていった。

六

平之丞がお石を忘れるまでにはかなりながい時日を要した。お石がいなくなつてはじめて、彼女がどれほど無くてはならない存在だったか、自分にとってどんなに必要な者だったかということがわかった。結婚を申込むくらいだから、むろん単純に好きだというていどの気持ではなかつた。然しそれほど根づよく、それほどはげしい感情を遺されようとは思わなかつた。みつともない子の時代から、歌など詠みはじめた前後、松井の庭の宴で初めて眼

を惹かれてのち、明け昏くれに見馴れた姿、人の気づかないところに心のこもった家常茶飯の数かずのこと、稗だんごの味までが、在ったときよりは鮮やかにまなまと思いだされた。こんなに深く人の心にくいりながら、あのようにみれんもなく去つてゆけるものだろうか。事に触れ物につけて記憶をかきたてられるやりきれなさに、平之丞はそのようなめめしい嘆息をもらすことさえあつた。——そういえば素性もわかつていなかつた、或るときそう気づいて、父の遺品を精くわしく調べてみた。然し手掛りになるような物はなにも無かつた。ごく若いときからの日記があるので、眼の痛くなるような細字を拾い拾い読んでみたが、やつぱりお石に就いてはなにも記してはなかつた。彼は惘もうぜん然として、飛び去

った鳥のあとを追想するような、つかみどころのないはかない気持で日を送っていった。

彼は二十七歳の春に結婚した。母が寂しがってすすめるし、かくべつ拒む理由もないので、父の在世ちゆうはなしがあつたという松井六弥の妹を娶めとつた。祝言が済んで暫く経つてからのことだが、六弥が訪ねて来ていっしよに酒を呑んだとき、

「いつかの花見の催しを覚えているか」

と笑いながら云つた、

「あれは実を申すとそでを見てもらうためだったのさ、わからなかつたのかね」

「うん……」

平之丞はそのときの絢爛たるさまを思いかえした、そしてそのなかにふとお石のおもかげをみいだしたが、もう心の痛むようなこともなく、そのおもかげもすでにおぼろなはかない印象になっていた。彼はふかい溜息ためいきをつき、六弥の盃に酌をした。

平凡ではあるが温かいしずかな結婚生活が始まった。明くる年に長男が生まれ、一年おいて長女ができた。そでは明るいまっすくな性質で、どつちかという賑やかなことの好きなほうだった。からだつきも肥えているし、いつも眼の笑っている顔だちで、常に身のまわりに生き活きた空気を漲みなぎらせていた。けれど三人めの子を身ごもってから健康がすぐれなくなり、嫁して来て六年めの秋、七月の子を身にもったまま嘘のようにあっけなく世を去っ

てしまった。……それは平之丞にとって小さからぬいたでだった、彼はうちのめされ、こころ昏くらんだ、「私には妻の縁が薄いとみえます」母に向かつてそう云ったが、それはお石のことをも含めての述懐に違いない、母親はそのとき彼はもう恐らく再婚しないであろうと推察した。

時はあらゆるものを掠かすめ去るものだ、どんなに大きな悲しみも苦痛も、過ぎてゆく時間に癒いやされないものはない。お石のばあいとは別の意味で、妻の死はひじょうに打撃だったけれど、さいわい母が丈夫で二児の養育をひきうけて呉れたし、いとまのない勤めがやがて平之丞を立ち直らせた。……それからは余り語ることもない、母親の察したとおり彼は再婚しなかった。すすめる者は

ずいぶんあつたが、いつも笑つてうけつけなかつた。たびたび食よくろく禄よくろくを加増されたこと、胃を病んで半年ばかり寝たことなど、記すとすればそのくらいのものである。いやいちどだけ思いがけない災難に遭つた、それは彼が三十二歳で藩主世子うえもんのすけ忠春の側そばがしらに任じられたとき、その出頭を嫉ねたむ者から讒ざん訴そされて、老臣列座の鞫きくもん問をうけた、私行のうえの根も葉もない事だつたので、すぐに解決したが、かなり巧みに仕組まれた讒訴で、覚えのない彼みずから一時はどきつとした程であつた、だがそれからは却かえつて重く用いられるようになり、右衛門佐の侍臣ちゆうでは無くてならぬ人物に数えられた。

こうして平之丞は五十歳になつた。けんもつ忠善はすでに逝せいき

去し、忠春が従五位の右衛門太夫に任じていた。彼はそれより五年まえに国老となり、藩政の中軸といわれる存在だったが、その年の秋、公務を帯びて京へのぼった帰りに、まったく思いがけない処ところで思いがけない人とめぐり会った。……岡崎までもう三里という池鯉鮒ちりうの駅へ着いたとき、彼はその近くに名高い「八橋やつはし」の古蹟」という名所があるのを思いだした。かねていちど尋ねたかと思つていたし、さいわい用務が早く済んで帰城にもゆとりがあつた、それで供の者をそこから先に帰らせ、独りになつてそちらへ見にまわつた。

海道を東のほうへはいり、むかし鎌倉道だつたと伝えられる草がくれの細径ほそみちを辿たどつてゆくと、牛田村うしだむらという処の松原はずれ

に苔こけむした標しるしの石が立つていた。その道しるべに従つて左へ折
 れ、穂立ちはじめた芒すすきの丘を越えると、熟れた稲田のかなたに遇あ
 つまがわ
 妻川の流れがみえた。……そこを八はしといひけるは、水ゆく
 川のくもでなれば、はしを八つわたせるによりてなんやつはしと
 いひける、そのさはのほとりの木かげにおりゐてかれいくひけり
 うん
 云ぬんという伊勢物語の一節なども思いだされ、平之丞の心は懐
 古のおもいに満たされるようだった。むかし杜かきつばた若なのあつた跡
 だという、丘ふところの小さな池をめぐり、業平塚なりひらづかなども見て
 やや疲れた彼は、すぐ近くにひと棟の侘わびた住居のあるのをみつ
 け、暫く休ませてもらおうと思つてその門をおとずれた。柴垣の
 内に老松ろうしようがみごとに枝を張り、さして広からぬ庭はいちめん

に萩^{はぎ}すすきが生い茂っていた。そのさほのほとりの木かげにおり
ゐて、かれいくひけりという文章を今の自分にひきくらべながら、
折戸を明けて庭へはいると、縁先に人がいてこちらへふり返った、
切下げ髪にした中年の婦人であつた。

「八橋の跡を見にまいつた者だが、卒爾^{そつじ}ながら暫く休ませて頂け
まいか」

そうたのむと、婦人はしとやかに立つて、

「どうぞお掛けあそばせ」とすぐにそこへ座を設けた、

「とりちらして失礼ではございますがどうぞご遠慮なく……」

平之丞ははいってゆきながら、婦人の姿にどこやら見おぼえが
あるように思い、縁さきまで来るとはつとして立ちどまつた。そ

してわれ知らず昂たかぶつたこえで、

「お石どのではないか」と叫んだ。婦人は眼をみはつてこちらを見たが、

「ああ」

とおののくような声をあげ、まるで崩れるようにそこへ膝ひざをついた。

七

昏れかかる日の残照が、明り障子にもものかなしげな光を投げている。別れてからも二十五年あまりの月日が、いま平之丞とお

石とのあいだに繰りひろげられ、初老にはいった者の淡々とした話しごえがもう一刻ときほども続いていた。

「ここへ来て二十年とすると、京にはながくいなかつたのですね」
「はい……」

「ここへはどういうゆかりで住みついたのでですか」

「榎先生のおせわでございました」

「そしてそれ以来ずっと独り身で、琴の師匠をして来たのですね」
「いいえ琴はいちども」

そう云ってお石は頬笑んだ、

「このあたりの子供たちに読み書きを教えたりしてまいりました」
「それが家を出るときの望みだったのですか」

そう云われてお石は眼を伏せた。平之丞は彼女の眉のあたりをじつとみつめていた。それからふとあらたまつた調子でお石どのと呼びかけた。

「……私は五十歳、あなたも四十を越した、お互いにもう眞実を告げ合つてもよい年ごろだと思ふ、お石どの、あなたはどうしてあのととき出ていったのか」

「……………」

「私があれほど欲し、母もねがったことを拒んだのは、ただこんなところに隠れて寺子屋の師となるためだったのか、お石どの、眞実のことが聞きたい、聞かせて下さるだらうな」

夕風が立つのだらう、庭の老松に折おりしょうしょう蕭々ねの音がわたる。

お石はその音を聞きすましてもするのように、ながいあいだ黙って俯向いていたが、やがて内へひくような声つきでこう云った。

「……お石はあなたさまの妻にはなれない娘でした、どうしても、妻になつてはいけなかつたのです」

「それはどういふわけです」

「わたくしは鉄性院てつしょういんさま（忠善）のおいかりにふれ、重科を仰せつけられて死んだ者の子でございます」

「そんなことが」

「ありのままを申上げるのです、お石は小出小十郎のむすめでございました」

小出というその名は平之丞を強くおどろかし、かつて松井家の

庭で語られた藩家の秘事や、そのとき聞いた小十郎の死の原因などがまざまざと思いだされた。

「……父は右衛門太夫さまがさる貴い方の御胤おたねだということをもれ聞きました、一徹の気性から繰返し殿さまに御諫言ごかんげんを申上げました、事実は根もない噂だったのでございましょう、血すじに就いてあらぬことを申すと厳しいお忿こうむりを蒙り、生涯蟄居の重い咎めを仰せつけられました、そのとき、父はよろこんでおりました、御血統の正しいことが明らかになれば自分の一身など問題ではない、これで浪人から召し立てられた御恩の万分の一はお返し申せる、そう云いまして、不敬の罪をお詫わびするため切腹致しました」

「……………」

「さむらいとして、決して恥ずかしい死ではないと存じますが、重科はどこまでも重科でございます、こなたさまの妻になつて、もしもその素性が知れましたばあいには、ご家名にかかわる大事にもなり兼ねません、どんなことがあつても嫁にはなれぬ、そう思いきめまして」

お石はそこで言葉を切り、片手の指でそつと眼がしらを推えた。この告白は平之丞の心をはげしく打った。彼は眼を瞠みはつてお石の顔をみつめたが、やがて頭を振りながら非難するようにこう云つた、

「あなたが誰の子であるか、どういう身の上かということとは私も

知らず、母でさえ聞いてはいなかった、父はなにも云わず、なんの証拠も遺さずに死んだ、あなたの素性は誰にもわかるおそ懼れはなかつたのですよ」

「そうかも知れません」

お石はそつと頷いた、

「仰しやるとおりわからずに済むかも知れませんが、けれど万一と
いうことが考えられました、知れずに済めばようございますけれど、
ど、万一にも知れたとしたらどう致しましょう、たとえば人は知ら
ずとも、わたくし自身はよく知っていたのですから」

そうだ、それを否定することはできない。平之丞は三十二歳の
ときの災難を思いだした。人の讒訴に依つて老臣の鞫問をうけた

ときのことを、——あのときもしお石を妻にしていたら。そしてもしお石の素性がわかったとしたら、そう考えるともううち消す言葉もなく、しずかに頭を垂れ、眼をつむった。

「それではもし、そういう事情さえなかつたら、あなたは私の妻になつて呉れたらうか」

「自分の身の上を知つたのは十三歳のときでございました、そのときはじめて父の遺書を読んだのでございます、そして、平之丞さまをお好き申してはいけないのだと、幼ないあたまで自分を繰返し戒めました、いま考えますとまことに子供らしいことでございますが」

そこまで云いかけてお石は立ち、部屋の奥から紫色の袱紗ふくさに包

んだ物を持って来た、

「これを覚えていらつしやいますか」

そう云いながら披ひらいたのを見ると、いつかせがまれて貸与えた翡翠の文鎮であつた。お石は平之丞の熱い眸子を頬笑みながら受けた、

「お好き申さない代りに、あなたさまの大事にしていらつしやる品を、生涯の守りに頂いて置きたかつたのです」

「では……」

と平之丞は乾いたような声で云つた。

「お石はずいぶん辛かつたのだな」

「はい、ずいぶん苦しゆうございました」

なんというひとすじな心だろう、愛する者の将来に万一のことがあつてはならぬ、その惧れおそれひとつでお石は自分の幸福を捨てた、今は年も長けたし情熱もむかしのようではない、すなおに苦しゅうございましたと云うことができる、然しまだ世の波かぜにも触れず、ひたむきな愛情が生きのいのちであつた頃、どのようなおもいで自分の幸福を諦めたことだろう。——自分では気づかないが、男はつねにこういう女性の心に支えられているのだ。平之丞は低頭するようなおもいで心のうちにそうつぶや呟いた。

「どうやら昏れてしまいました」

やがてお石は窓のほうへふり返つた、

「もしおよろしかったら、お泊りあそばしませぬか、久方ぶりで

下手なお料理をさしあげましょう、そして墨丸と呼ばれた頃のこと
とを語り明かしようございますけれど」

「ああ、そんなこともあった、たしかに」

平之丞は胸ぐるしそうなこえでこう云った。

「ずいぶん遠い日のことだ」

縁側の障子も窓のほうも、すでに蒼茫そうぼうと黄昏たそがれの色が濃くな
って、庭の老松にはしきりに風がわたっていた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1945（昭和20）年9月

※初出時の表題は「文鎮」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

墨丸

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>